

下水道ネットワーク幹線の構造

ネットワーク幹線は、地震の影響を受けにくい地下深い所に、大口径のシールド工法により埋設します。

平成7年に起こった阪神・淡路大震災でも、同様の深さに埋設された下水道管きよの被害は小さく抑えられました。

ネットワーク幹線は、地震に強く、災害時でも大いに機能を発揮することが期待できる施設です。

シールド工法

下水道ネットワーク幹線はトンネルや地下鉄などの工事に幅広く用いられているシールド工法を採用しています。

シールド工法は、工区の大部分において、地表面を掘削することなく、地中深くを掘り進んで下水道管きよを築造できるため、工事期間中の市民生活への影響を最低限に抑えることが可能です。



須磨浦汚水幹線(その2)シールドマシン



シールド2次覆工(FRPM)

大口径幹線

神戸市のネットワーク幹線は、人が立って歩けるほどの大きな下水道管きよもあります。

その規模は、総延長約33kmで、内径は最大3.0m、ネットワーク幹線の規模としては、国内最大級の規模です。



「シールドトンネル体験」
市民に一般公開されたネットワーク幹線



完成したネットワーク幹線

地中深くで 処理場と連結

一般に、地下に埋設される土木構造物は、地下深くなるほど地震による影響が少ないといわれています。

ネットワーク幹線は、最大約35mの深さに埋設されており、地震に強い施設といえます。

